

4 Chauncy Lane

吉原秀東

1979 年 6 月から 80 年 6 月の帰国まで一年間住んだ下宿があった。
場所は米国 Massachusetts 州、Cambridge 市。

大家はシニアの女性（多分未亡人）。成人の息子が時折帰宅していた。
3 階からなるメゾネットタイプの Condominium で、真ん中の 2 階に大家が住み、
最上階と 1 階は大学院生が借りていた。台所は共用していた（ように記憶する）。
バスルームとトイレについては記憶が無い。

自分はその 1 階に住んでいた。当時、H 大学大学院でロシア語を学んでいた。
1978 年 8 月に会社から派遣された社会人留学生だった。その学科には日本から
外務省、M 商事、I 商事が留学生を派遣していた。大学側も受け入れには積極的
であった様だ。

寝ている時間以外は自宅か大学で勉強だ。人生の中で一番良く勉強した時間
であった。会社から派遣され、給料（但し 3 割カット）も賞与も貰って勉強する
ことは正に業務であった。遊んでいるヒマは無かった。40 年経った今でも、試
験の成績が芳しくなく、学科を drop する夢を見ることがある。

1980 年 6 月に「無事に」2 年間の履修プログラムを終了し、帰国することにな
った。社会人 4 年生になっていた。

帰国の荷造りをして、船便と航空便に分けた。最後まで残った机周りの辞書や
書籍などの荷物を航空郵便で発送して帰国の途についた。

帰国後程無くして、かの大家から郵便が届いた。曰く、「郵便局から航空便で
出した荷物が戻って来た。重すぎて航空郵便では送れないという。どうする？船
便で送り直すか？」

業務多忙もあり、大家への返信が出来ずにいた。そうこうするうちに、忘却の
彼方に置かれた。その内、海外駐在に出て、この件は完全に忘れ去った。何が入
っていたのかも思い出せない。今でも、あの住所に私の航空郵便は残っているの
だろうか。それとも、大家のマダムかその息子によって焼却処分されたか。今も
って定かでない。今頃になって、あの時の荷物の中身が妙に気になる。